〈巻頭言〉

残日録

日名子　太郎

藤沢周平さんの『三屋清左衛門残日録』の放映が始まった。

「残日録」とは、「日残リテ、昏ルルニ、未ダ遠シ」の意だそうである。私も全くこの主人公と同様なので、このところ実に多くの本を読む。元々人間ががさつにできているから、これと思えば手当り次第である。その中で出会った言葉が、習い性となるので、長年携わった保育のことにどうしても結び付き勝ちなのは因果なことである。

ヘルマン・ヘッセの“Siddhartha”（シッダルタ）に「いつも私たちは途中にいるのだ。私は途中にいるのだ。」「〈求める〉とは、何か目標をもつことです。〈見いだす〉とは、とらわれぬこと、懐を開くこと、目標をもたないことです。」とあった。もう数年も前から〈求める〉ことは止めて、〈見いだす〉ことの心境にあるような私だが、それでも次から次へと関係のある仕事がふってくる。

これもその一つであるが、昨年の三月まで三年ほど香港の日本人幼稚園の面倒を見てきた。大学の講義の傍らであるから毎月二回出かけて合計地球を八度ほど回る旅をした。そこで遭遇したの

は、今までに体験したことのない、土地が少ないため運動場の規定がなく、毎月二回出かける公園でやっと戸外遊びをし、四季の変化が殆どなく高温多湿、子どもが眼にする文字は英字と漢字、家庭のメイドさんはフィリピンかタイの人で日本語が話せない、怪我、急病の時に行く病院では、通訳が必要等々といった中で、日本的保育をすることの苦労はまるで笑い話の連続だった。既存概念からある程度脱却できないと保育ができないという経験は貴重である。

ところで、五十七年後の西暦二〇五〇年には、地球人口が百億を越え、人口過剰で石油や食料も枯渇するのではという時代に、一体どんな子どもを育てたらよいのだろうか？

菜根譚に「看半開、酒飲微酔」とある。また徒然草の第三段には「よろずにいみじくとも、色好まざらむ男はいとさうざうしく、玉の盃のそこなき心地ぞすべき。」とあり、易経では「窮即変、変即通」という。どれがよいかは、その人次第だが、奇麗事や平均値的人間観で律することのできない時代が到来しそうな気配だが、私などを含めてその頃もう生きていない年配のものは別として、現在の乳幼児や、これから生まれてくる子どもたちにどんな保育を、教育を考えてやったらよいかということは我々の使命なのではないのだろうか。まあ、そんな先のことは、自分たちで考えるさと洞が峠を決め込んでよいものか。

何か、今のわが国の保育も教育も現状の取り繕いに終始して、保身と安易さに全てを委ねているような気がしてならないのだが…。

（聖徳大学）